国立大学における入試研究の動向

国立大学における入試研究の動向

入学試験研究の目的は、入試に関するデータを収集、整理してその規則性を読みとり（帰納）、それを入試の改善に役立てる（演繹）ことである。入試研究は受験者側にとって役立つか？すなわち、何らかの方法を見出して、それにより実力以上に合格しやすくなることは可能だろうか？もしそのような方法があるならば、大学側は試験を改善することによってそれを除くべきであり、したがって入試研究は受験者には役立たないはずのものである。実際には大学の入試改革には時間がかかるので、一時的に不公正が生じるおそれがある。これが研究結果が一般に公開されない一つの理由になっているが、将来は公開の方向で考えなければならない。

大学入試研究は組織的に活発になったが、まだ科学として確立したという段階には至っていない、資料を収集し、蓄積することが第一の仕事であり、その方法、機械化する方法も研究対象である。資料の整理、分析については各大学の研究方法も高度化している。資料として標準的なものは高校の調査書、入試の共通1次、2次試験成績、それに追跡調査として入学後の成績である。大学卒業後の能力を評価するものとして各種資格試験（医師国家試験など）の合否を利用する場合も多い。これらの数量の平均値、標準偏差、相関係数を計算し、その経年的変化を観察するのが正統的方法である。いくつかの結論が報告されており、それにはその大学・学部の特殊事情によるものもあり、普遍性をもつものもある。普遍的なものは公表するのが適当と考える。ここ数年にわたって一定していることは、たとえば高校調査書成績と学内成績の相関が高いことで、多くの大学からの報告がある。これに対し入試成績と学内成績との相関係数はそれほど大きくないとの指摘がある。

成績を統計的に扱う場合問題となるのは、その分布が必ずしも正規分布とならないことで、したがって標準偏差、相関係数だけではその性格を表すのに十分でない。どのように扱うべきかについて確立した考えはないので、種々の方法が用いられている。いくつかの区間に分けて区間毎に統計をとる方法、配点を変えたときの合格者の入れ替わりを数える方法等であるが、分布を図示して視覚に訴えるのが確実かもしれない。合格者集団に対し、その合否判定に用いた総合点の分布は、境界点で切断されたものである。この選抜効果をどう補正するかについてもいくつかの試みがあるが、やはりまだ確定していない。今後の研究課題であろう。各科目の配点比を変えることは入試改善の第一歩であり、それによる変化予想など多く行われている。科目の比重をどう評価するかについても新しい提案がある。

以上標準的資料とのべたものの他に、面接、

小論文、実技などを実施している大学での研究報告がある。筆答試問については私達はかなりの経験をつんできたが、これら新しい選抜法の情報は貴重である。短時間の面接では有意の結果が得られない、チェックポイントを設けるとよい等の報告がある。パタンを評価して数量化することの客観性は研究したい問題である。

このほか学生の意識調査、志願者の選択行動についての研究等があり、これらは来年以降受験機会が複数となる場合、重要な資料となるであろう。

以下、今年度の研究内容を項目に分類して紹介する。ただし一つの研究でいくつかの項目に関連するものもあり、はっきり分類できるものではないことを御承知願いたい。